

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00705

研究課題名（和文）用法基盤モデルから探る第一・第二言語習得の普遍性と年齢要因に起因する可変性の追究

研究課題名（英文）The construction of language structure based on the schema generation in first and second languages

研究代表者

橋本 ゆかり（Hashimoto, Yukari）

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：40508058

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、認知言語学の用法基盤モデルの観点より、日本語の第一言語（以下、L1）と第二言語（以下、L2）の習得プロセスとメカニズムの両方を明らかにすることであった。まずは、L2児、L1児、L2大人の可能形習得に焦点を当てて追究し、領域固有の特徴と普遍的な言語構造構築のプロセス、そして可変性を生む要因を明らかにした。次に名詞修飾節に注目して、L2児、L2大人の習得プロセスにおける普遍性と可変性について追究した。さらに、L2児にとって必要な環境について、言語習得理論の観点からの追究と、教育現場にいる教員や支援者の視点からの研究を進め、編著書にまとめ、現場に還元した。併せて教材開発も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

L1児、L2児、およびL2大人といった3者を比較することで、習得のプロセスの普遍性と可変性を明らかにし、可変性を生む要因を明確にすることができる。世界的に注目されている認知言語学の用法基盤モデルの観点からの研究であることから、理論的貢献にも繋がる。近年、日本において、日本語を第二言語として習得し、かつ日本の学校において学習を進めなければならない外国につながる子どもが増えている。かれらの抱える問題を明らかにし、対処方法を検討し教育的示唆を示したことは、社会的貢献であるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify both the processes and mechanisms of acquisition of Japanese first language (hereafter, L1) and second language (hereafter, L2) from the perspective of the usage-based model of cognitive linguistics. First, the study focused on the acquisition of possible forms by L2 children, L1 children, and L2 adults, and clarified domain-specific features, the process of universal language structure construction, and factors that produce variability. Next, focusing on noun-modifying clauses, we investigated universality and variability in the acquisition processes of L2 children and L2 adults. Furthermore, we investigated the environment necessary for L2 children from the perspective of language acquisition theory and from the perspective of teachers and supporters in the field of education, and compiled our findings in an edited book. In addition, I also developed teaching materials.

研究分野：日本語教育

キーワード：認知言語学 用法基盤モデル 第二言語習得 フィールドワーク コーパス研究 文法 外国につながる子ども 日本語教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

【言語習得のメカニズムをめぐる理論的対立】

海外の第一言語(L1)、第二言語(L2)習得研究においては、固まりのまま表現を丸暗記する学習がルール獲得に繋がるのかという問題が提示され、1960年代以降、言語習得理論の対立を背景に著しい変遷を経て今日も尚白熱した議論が続いている。近年、英語のL1習得研究では、インプットを固まりで取り込み、それらを蓄積し抽象化によりスキーマを生成し文法を獲得するという認知言語学の用法基盤モデルが注目されつつある。スキーマとは過去の経験を抽象化し構造化することによって生成された鋳型・規範状の知識である。Tomasello(2003)は1語をピボット(軸)にしたピボット・スキーマの生成(例 More+)を習得プロセスの一段階に位置づけている。しかしながら英語のL1習得で提示された用法基盤モデルの知見が日本語において、そしてL2習得においても有効であるのかについてはいまだ十分は結果が提示されていない。

【L1習得とL2習得の異同に関する意見の対立】

L1とL2習得の共通性と差異について、1970年代にL1習得=L2習得仮説が提示されたものの、母語の影響やインプットの違いによって双方のプロセスが異なるという指摘もある。L1とL2習得が同じなのか、また異なるのか、そしてもし異なるのであれば、何が差異を生み出すのかについてさらなる検討が必要である。

【L2児に関する研究の社会的要請と革新的貢献】

近年日本ではグローバル化とともに保育園や学校などでL2児が急増している。L2児への教育支援対策は喫緊の課題であり模索は既に始まっているが、L2児の言語習得の実態を明確にした上での教育への提言はない。現状ではL2大人に対する教育方法をL2児に当てはめる事例もある。L2児の言語習得の特徴を明確にすることは日本社会を担う人材育成に繋がる。参加者に関する研究として移民問題を抱える海外の国々に研究成果を発信し共有化と進展を図る必要もある。

先行研究を整理すると、次の3つの学術的問いが研究の核心となる。固まり学習とルール獲得との関係、何を中心に、どのように知識の組織化が進んでいくのか、L1とL2習得の違いはあるのか。日本語の習得研究においては固まりの産出が報告されているものの、どのように文法ルール獲得へと繋がるのかについて不明な部分が多い。言語類型論的に異なる言語の習得は異なるのかといった視点ももちつつ、日本語のL1、L2習得において追究する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、研究の積み重ねにより執筆者が提示した言語習得のメカニズムに関する仮説を検討することを中心に据え、進める。仮説とは、固まり学習から、暫定のルールであるスキーマを生成し、それらの合成により言語構造を構築するという言語構造構築メカニズム「スロット付きスキーマ合成仮説」(Composition of Schemas with Slots、以下、CSS仮説)(橋本2011、2018)である。L1、L2習得における仮説の妥当性を検討し、加えてL2児、L1児、L2大人の習得プロセスの共通性と差異を明らかにし、特徴を明確にする。研究は文法カテゴリーごとに行うが、課題は次の5つである。

- 課題1) L2児の習得プロセスを明らかにし、CSS仮説の妥当性を検討する。
- 課題2) L1児の習得プロセスを明らかにし、CSS仮説の妥当性を検討する。
- 課題3) L2大人の習得プロセスを明らかにし、CSS仮説の妥当性を検討する。
- 課題4) L2児、L1児、L2大人の異同を明らかにし、差異をもたらす要因を追究する。
- 課題5) L2習得に必要な教育環境を明確にし、教材開発を行う。

3. 研究の方法

本研究はL2児、L1児、L2大人とトライアングレーション式に追究する(図1)。

L2習得であるが年齢差がある場合はどうか、年齢は近いがL1とL2習得の違いがある場合はどうかといった具合に要因を絞り習得プロセスの共通性と差異を検討する。

本研究では、同じ文法カテゴリーにおいて3者の比較ができるように、未分析の領域と文法カテゴリーについて課題1から4に沿って進める。インプットや認知的処理負担度と習得

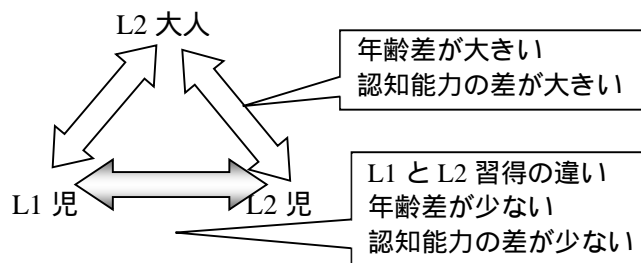


図1 L2児・L1児・L2大人のトライアングレーション式アプローチ

順序との関係性を考察の視点の1つとする。課題1から4の結果を踏まえて課題5に取り組む。データはフィールドワークにより5年以上収集したL1児、L2児のデータがある。必要に応じてデータを補う。L2大人の研究では既存のコーパスを使う。データは数量的かつ記述的に分析する。

4. 研究成果

主な研究成果についてまとめると次のようになる。

(1) 課題1~4につき、可能形式に焦点を当てて追究した。課題1と課題2については既に結果を得ていたため、課題3、つまりL2大人の習得プロセスについて、コーパスを用いて明らかにし、その上で、課題4について検討した(橋本2019)。

L1幼児、L2大人、L2幼児の共通性を抽出し、加えて共通性と差異が混在する現象について、年齢とL1かL2かを糸口としてそれらの原因を探った。この2つのうちどちらか一方ではなく、双方の視点を用いることで明らかになることもあった。インプット、認知的負担度、インストラクション、母語といった要因がいくつか浮かび上がり、それらが絡み合いながら習得順序を形成していることが明らかとなった。おおむね、次のようにまとめることができた。

インプットの量と認知的負担度が習得順序の主な決定要因である。インプットはルールの検証にも必要であるため、インプットの量は言語体系の精密さにも影響する。ただし認知的負担度については、学習者の年齢や認知的発達レベルも関係してくる。

教室におけるインストラクションは、L2習得開始時の学習者の知識体系と、習得の方向性に影響する。

母語の知識は、第二言語のルールを類推する元データとなり、知識が不完全な状態での運用時に補完的に用いられる。

L1幼児、L2大人、L2幼児を相対させることで特徴を示し、教育的示唆に言及した。L1幼児もL2幼児も具体事例を起点とする習得である。L2幼児はインプットがL1幼児ほど得られないため、「できる」スキーマという抽象度の低いルールを生成する段階があった。L2大人は教室学習で得たルールを現実世界で検証していくという、幼児とは逆方向を辿っていた。L2大人は、L1幼児のようなインプットからルール生成を行い相互に関連づけていくプロセスとは異なるため、L1幼児とは異なる言語体系を構築してしまう可能性がある。ルールに関しても個々の知識を緊密に繋げていくような教育が必要であると考えた。

(2) 課題1について、名詞修飾節に焦点を当てて追究した(橋本2021)

英語母語の幼児(1名)がどのように日本語の名詞修飾節を習得していくのかを探った。1年9か月に及ぶフィールドワーク(幼稚園、1回/2週間・1時間/回)により採集した自然発話から、用言が前接する名詞修飾節(非規範を含む)を意図した文を抽出し、形態的变化に注目し記述分析を行った。主な結果は次の通りであった。

初期に「要る人?」の固まり産出が見られ、その後「~人」の産出が増え非規範形態が増えたことから、「(スロット)+人(軸)」スキーマの生成が推察された。スロット内にバリエーションが見られ、名詞、軽動詞や非規範の視点の動詞が使用される。

軸語において「人」、および人を表す名詞のみの段階から拡張が見られた。既存の「+の+」スキーマ(橋本2011)に依存する産出文が見られ、競合が推察された。前段階で産出の多かった「が」格の関係節化が容易であることが推測された。

「誰」との非規範の併用文が出現する。二重表現は英語の構文スキーマとの相互作用により創発した可能性がある。

語用論的産出も見られ、関係節が複文構造へと発達する前身となっている可能性が推察された。

日本語の名詞修飾節の構造がインプットに多い固まり表現の習得に始まり、それを基にスキーマが生成され発達することを示した。加えて母語のスキーマ的知識との相互作用の中で構造が構築されるという母語転移の可能性を指摘した。

(3) 課題3、4につき、名詞修飾節に焦点を当てて追究した。(橋本2022)

L2大人の名詞修飾の習得について探索的に調査した。C-JASコーパスの韓国語母語の学習者(K2)1名のデータ3年(総語数64839)8期分(1・2期は日本語学校で学習)を、a.修飾部の品詞(名詞・動詞・イ形容詞・ナ形容詞等)、b.内・外の関係、c.規範・非規範、の観点から期ごとに数量的および質的に分析した。結果、次のことが明らかになった。

1期より名詞修飾の使用数が多いことから、{(修飾部)+名詞(被修飾部)}という名詞修飾のスキーマを生成していることが推察された。

修飾部の動詞に注目すると、3期以降視点が絡み活用を要する動詞形(使役・可能・受け身)が出現している。被修飾部は、内の関係では初期に人を表す名詞が多い。外の関係では1期に相対性を表す「前」も見られる。「時」「日」も多いが、3期には「時」だけではなく「瞬間」「うち」もみられ、表現が精密化・多様化している。日本語学校の教科書に説明があるため初期より「相対」「同格」を表す外の関係の構文スキーマを生成していた可能性が考えられる。

「の」の過剰使用、つまり{(+) (+)}スキーマとの相互作用による非規範「(修飾部)+の+

(被修飾部)」がみられた。

名詞の場合「の」の過少使用が多く 8 期まで継続するため、初期の語用論的産出ではなく韓国語{名詞+名詞}の転移に起因している可能性が考えられた。

L2 大人は、L2 幼児と比べ逸脱が大きいことから、教室学習に基づいて名詞修飾構文のスキーマを獲得し、途上、自らが生成した品詞横断的および品詞ごとのルール、ユニットごとの固まり(スキーマ)、母語のスキーマとの相互作用により構文の再構築と修正を進めることが推察された。多様なレベルの「スロット付きスキーマ」(橋本 2018 等)の合成と相互作用の結果といえる。

(4) 課題 5 について、L2 児(外国につながる子ども)の日本語の習得、および学習について必要な環境について追究した。教育現場にみられる、さまざまな問題について整理し、理論からの説明を行った。加えて、小学校教員、中学校教員、高校教員、元校長、元教育委員会の指導主事、そして保護者支援者、就職支援といったさまざまな立場と視点から、L2 児にとって、どのような教育や支援が必要なのか、そして L2 児の将来を見据えた支援はどのようなものなのかについて、編著書(橋本 2024)にまとめた。

(5) 課題 5 について、教材開発を行った。第二言語習得の理論、認知言語学の言語習得理論について執筆者の研究知見も含めて執筆し、それらを踏まえて考案したタスク(ゲーム形式)を編著書(橋本 2023)にまとめた。

本研究の成果は、前述した世界の理論的対立や議論、および社会情勢を背景にしたものであることから、理論的、および社会的貢献が認められると考える。上記(1)~(3)については、L1 と L2 習得の異同がプロセスに表れる原理を L1 児、L2 児、L2 大人の 3 者の視点から、文法カテゴリーごとに探っており、新規性がある。縦断的に丁寧に紐解いている点で、日本語習得のメカニズム解明に有意義な結果を示すことができたと考える。今後の展望としては、さらに知見を積み重ねることで、言語構造構築のプロセスおよびメカニズムの全体像を明らかにしていきたい。上記(4)については、喫緊の社会的問題に対応した研究であり、教育現場への還元は意義があると考えられる。今後も、L2 児(外国につながる子ども)の抱える様々な問題を多角的に捉え、どう支援したらよいかを追究していきたい。(5)については、認知言語学と第二言語習得の双方の理論を合わせた開発であったことから、新たな視点からの教材を現場に提供できたと考える。

<引用文献>

- 橋本ゆかり(2011)『普遍性と可変性に基づく言語構造の構築メカニズム - 用法基盤モデルから見た日本語文法における第一言語と第二言語の異同 - 』風間書房。
- 橋本ゆかり(2018)『用法基盤モデルから辿る第一・第二言語の習得段階 - スロット付きスキーマ合成仮説が示す日本語の文法』風間書房。
- 橋本ゆかり(2019 共著)『学習者コーパスと日本語習得研究』野田尚史・迫田久美子編 くらしお出版。
- 橋本ゆかり(2021)「日本語を第二言語とする幼児の名詞修飾節の習得プロセス - 「スロット付きスキーマ」合成仮説に基づいて - 」『日本認知言語学会論文集』第 21 巻、386-392。
- 橋本ゆかり(2022)「韓国語を母語とする日本語学習者の名詞修飾構造の習得 - 「スロット付きスキーマ」合成仮説の観点からのコーパス分析 - 」『日本認知言語学会論文集』第 22 巻、290-296。
- 橋本ゆかり編著(2023)『認知・言語理論から日本語教育実践へ』春風社。
- 橋本ゆかり編著(2024)『立体的に見る外国につながる子どもの教育課題』風間書房。
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 25
2. 論文標題 「認知言語学の用法基盤モデルから考えるオノマトペの学習教材 - コンテキスト重視の構文獲得のために - 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ヨーロッパ日本語教育Japanese Language Education In Europe』	6. 最初と最後の頁 665-670
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 22
2. 論文標題 「韓国語を母語とする日本語学習者の名詞修飾構造の習得 - 「スロット付きスキーマ」合成仮説の観点からのコーパス分析 - 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本認知言語学会論文集』	6. 最初と最後の頁 290 296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 40
2. 論文標題 「共生社会に向けた年少者日本語教育の課題 - グローバルな視点からの意識変革と再構築 - 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『横浜国大 国語研究』	6. 最初と最後の頁 60-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 13
2. 論文標題 「ディベートと前後ライティング融合授業における大学新入生の学び - コミュニケーション力・論理的思考力・リテラシーの育成 - 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『教育デザイン研究』	6. 最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 21
2. 論文標題 「日本語を第二言語とする幼児の名詞修飾節の習得プロセス - 「スロット付きスキーマ」合成仮説に基づいて - 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本認知言語学会論文集』	6. 最初と最後の頁 386-392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 「言語はどのような認知能力によって習得されるのか 日本語学習者への教育を考える」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『言語習得と日本語教育』	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本ゆかり	4. 巻 20
2. 論文標題 「多義語類推タスク活動 の実践 - 認知言語学・用法基盤モデルから考える教材」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『BATJジャーナル』	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Yukari Hashimoto and Sachiko Yamachika
2. 発表標題 Transformation of an Elementary School into One That Respects and Accepts the Diversity of Children with Multilingual and Multicultural Backgrounds: Practices of Elementary School Administrators
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yukari Hashimoto, Chizumi Miyazawa and Sachiko Yamachika
2. 発表標題 Educational Practices for Multicultural Conviviality and Methods for Reforming Teachers' Awareness
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 「認知言語学・用法基盤モデルの 理論と実践の橋渡しーコンテキスト重視の日本語教育 - 」
3. 学会等名 2022 年度 南米スペイン語圏日本語教育会議 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 「外国につながる子どもに向けた教科横断STEAM教育」
3. 学会等名 『現代的教育課題に向き合う 持続可能な個別最適な学びを求めて』横浜国立大学シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 認知言語学から考える言語習得
3. 学会等名 子どもとおとなの言語習得と教育デザイン研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 認知言語学の用法基盤モデルに基づいたオノマトペの学習教材 コンテキスト重視の構文獲得のために
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (16th EAJS International Conference 2020) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 韓国語を母語とする日本語学習者の名詞修飾構造の習得 - 「スロット付きスキーマ」合成仮説の観点からのコーパス分析 -
3. 学会等名 日本認知言語学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 外国につながる子どもの現状と課題
3. 学会等名 ESD研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本ゆかり
2. 発表標題 日本語を第二言語とする幼児の名詞修飾節の習得プロセス - 「スロット付きスキーマ」合成仮説に基づいて -
3. 学会等名 日本認知言語学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋本ゆかり 窪津宏美
2. 発表標題 言葉の壁を乗り越えて繋がる多様性と自己確立の可能性 - 多言語・多文化化する小学校における「子どもパネルディスカッション」の追跡調査 -
3. 学会等名 日本語教育学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 橋本ゆかり (編著)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 『外国につながる子どもの教育課題－立場の異なる教員・支援者・子どもを通して－』	

1. 著者名 橋本ゆかり (編著)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 207
3. 書名 『認知・言語理論から日本語教育実践へ－類推タスクアイデア29 - 』	

1. 著者名 橋本ゆかり (共著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 20
3. 書名 『学習者コーパスと日本語習得研究』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究者総覧 横浜国立大学 橋本ゆかり
https://er-web.ynu.ac.jp/html/HASHIMOTO_Yukari/ja.html
橋本ゆかり研究室
<https://dr-yukari-hashimoto.jimdofree.com/>
子どもと大人の日本語習得と教育デザイン研究会
<https://laeca-ynu.jimdosite.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A%E7%B4%B9%E4%BB%8B/>
ジャーナル『言語習得と日本語教育』
<https://laeca-ynu.jimdosite.com/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%83%AB/>
研究者総覧 横浜国立大学 橋本ゆかり
https://er-web.ynu.ac.jp/html/HASHIMOTO_Yukari/ja.html
橋本ゆかり研究室
<https://dr-yukari-hashimoto.jimdofree.com/>
子どもと大人の日本語習得と教育デザイン研究会
<https://laeca-ynu.jimdosite.com/>
ジャーナル『言語習得と日本語教育』
<https://laeca-ynu.jimdosite.com/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%83%AB/>
言語習得と日本語教育
https://ynu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=966

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------